

幹周測定法

■目次

- 1, 世界の幹周測定法
- 2, 日本の幹周測定法の歴史
- 3, これまでの幹周測定法の問題点
- 4, M式幹周測定法(国際基準を目指す)の確立

■ 1, 世界の幹周測定法

幹周測定法の国際基準というものは、今だ確立されていない。地域によって、測定する地上よりの距離も異なっているのが現状である。

米国森林警備隊では地上 4.5 フィート (1.37m)とし、ほとんどのヨーロッパ諸国では、地上 1.3m としている。その中でも英国とベルギーは地上 5 フィート (1.52m)と定めている。

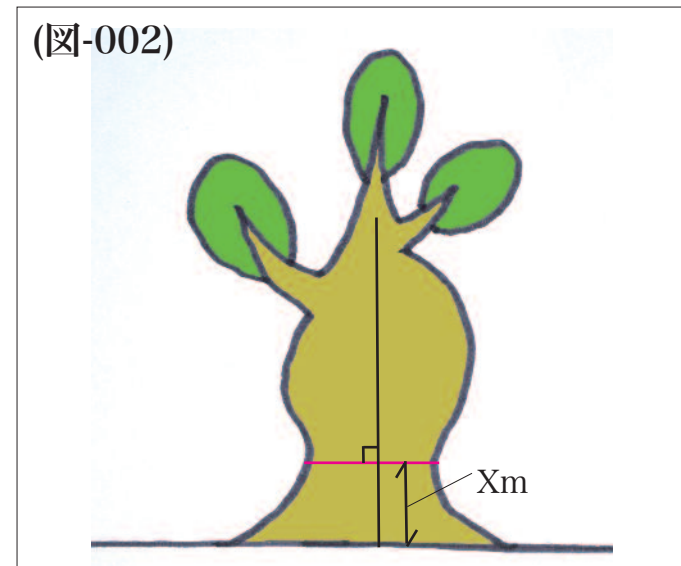
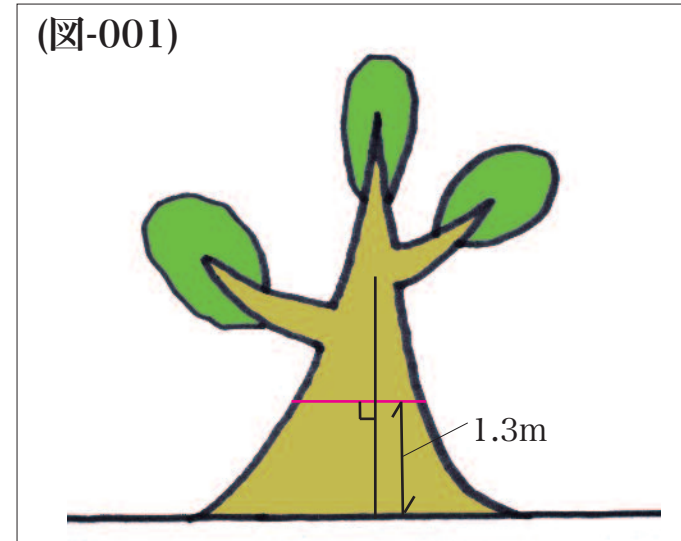
現在、その他の国(日本を含む)では、地上 1.3m 地点を測定する事が多くなっている。

樹木の形状による測定方法の違いは、これも国際基準はない。しかし、常識的にその方法論を示している。ここでは米国森林警備隊(米国式)と英国式の図解を基に解説する。

この測定方法は、一般の立ち木では全く問題にならないが、幹周 4m 程を越える巨木になると、測定方法の違いによって、極端に数字に開きが出てくる。これが「M式幹周測定法」で国際基準を定めなくてはならない理由となる。

■平坦地に直立する樹木の測定方法

樹木の中心線に直角に測定する(図-001)。コブや凹凸を避けて測定し、最もくびれている位置を測定し、その位置(Xm)を記録する。(図-002)



■分岐幹の測定方法

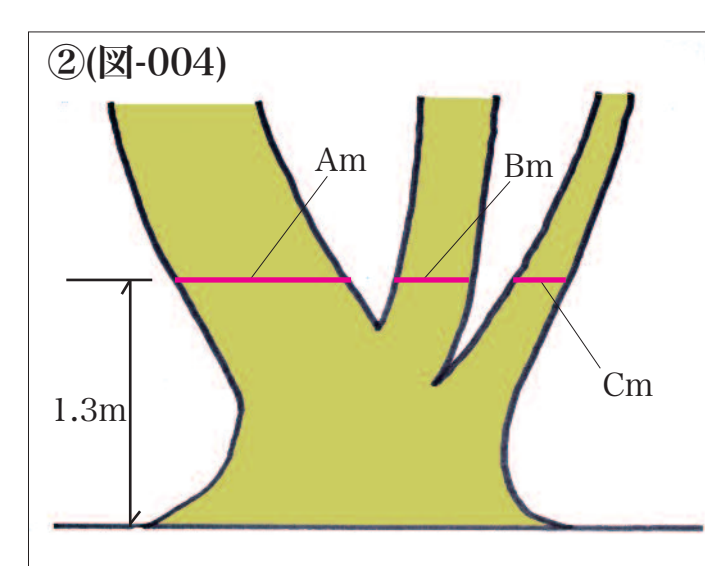
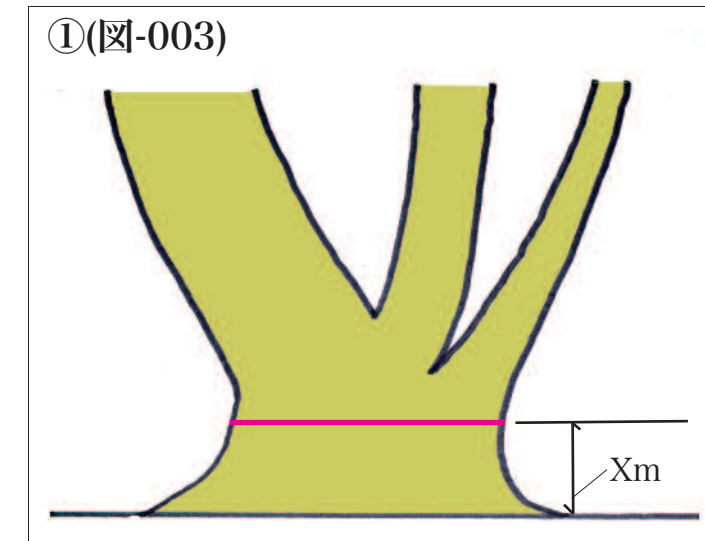
根元近くで多数に分岐する樹木では、①根元の分岐幹が集合している部分を測定する(図-003)。

②地上 1.3m 地点の、分岐幹おのこの幹周を測定し、記録する(図-004)。この場合の記録方法を以下に示す。

Am+Bm+Cm

(注 +は記録記号である・英国式)

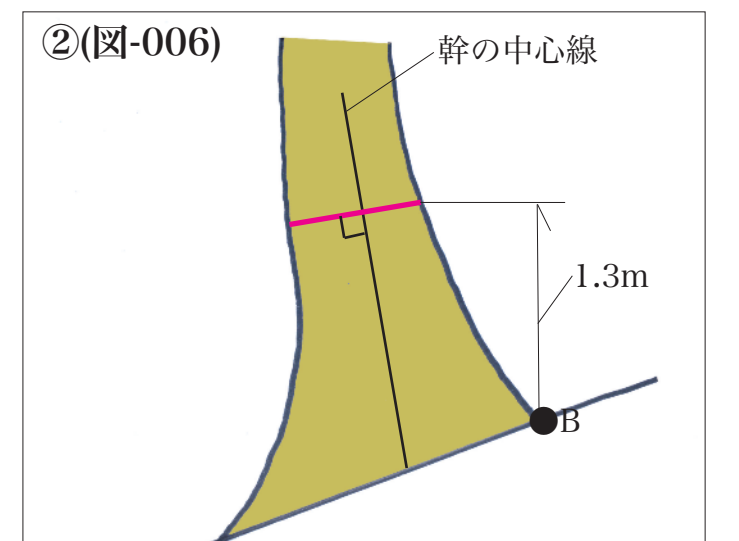
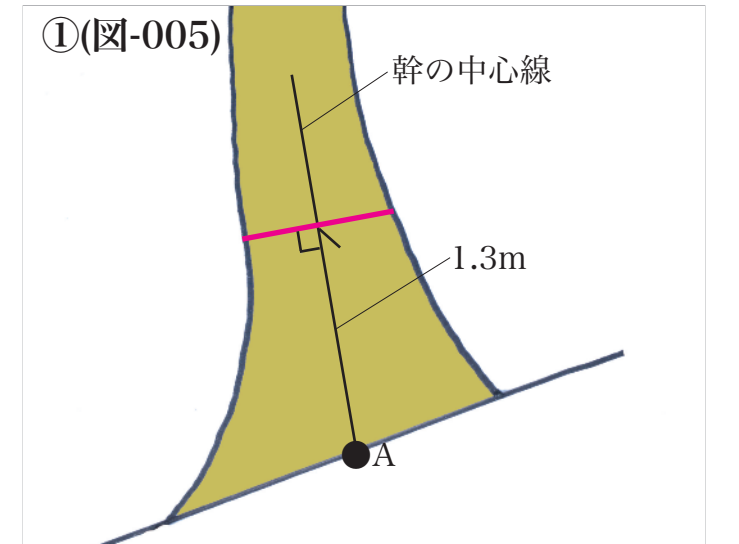
(※この表記を見て、日本の樹木測定に知識のある方は、ピンとくるであろう。日本のある団体では、これをプラスと読み、各々の幹周を足し算したものを幹周とするという、誤認をしたと想像される。)



■傾斜地に立つ樹木の測定方法

①傾斜地に立つ樹木の場合、幹の中心線に直角に測定する。(図-005)。

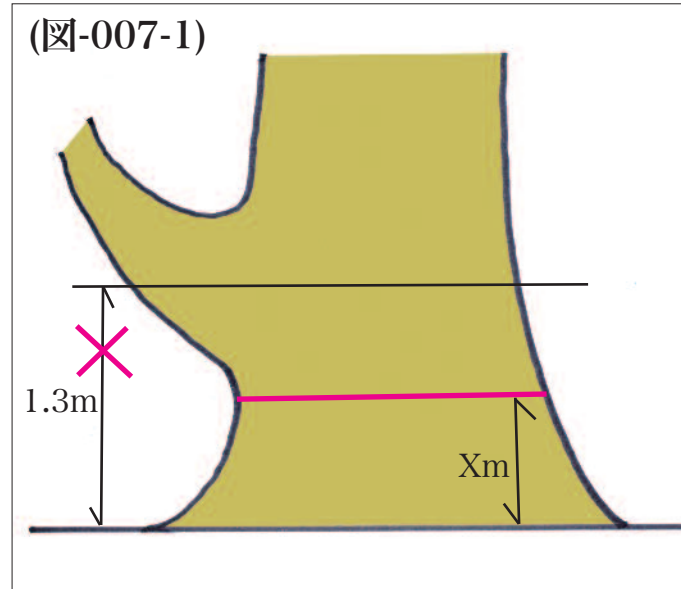
②山側接地面 1.3m から幹に直角に測定する(図-006)。



①②の測定方法の違いは、1.3m の根元地点 AB の相違で、②の山側接地面 B は比較的特定しやすいからと解説されている。しかし、実際には、①の幹の中心地点 A を特定することは、意外に容易である。又、①より②の方が上位を測定する事になる。この違いは、巨木測定になると、大きな問題になる。

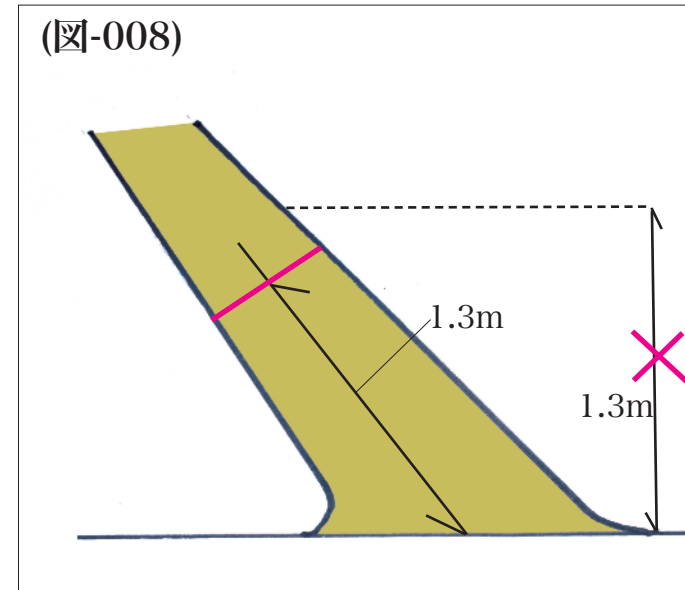
■地上 1.3m 以下に分岐幹がある場合の幹周測定方法。

地上 1.3m 地点の分岐幹を含む周囲をむりやり測定しない。分岐幹以下の最もくびれた部分を測定し、その位置(Xm)を記録する。

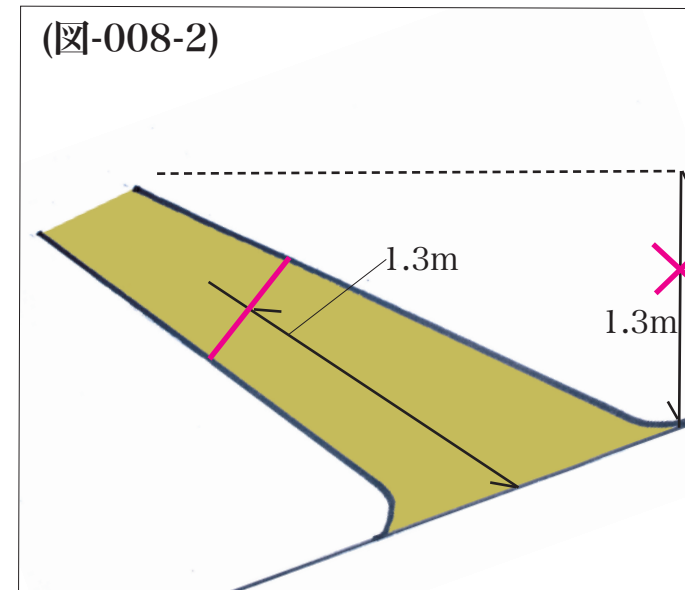


■水平な地面に傾斜する樹木の幹周測定方法。

幹の中心線から 1.3m 地点を、幹に直角に測定する。垂直距離ではない。



※図-008 を傾斜する地面に傾斜する樹木の場合を考えてみる(図-008-2)。



すると、山側 1.3m で測定する方法は無理があることが解る。

すなわち、傾斜地に立つ樹木の測定方法で、山側 1.3m 地点を測定する方法は、国際基準にそぐわないと結論される。

以上が世界で示されている幹周測定法の主なスタイルと、その一部評価である。3項で、その問題点を考えてみる。